

---

# けいおん！先輩とあずにゃん

小日向 湊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！先輩とあずにゃん

### 【Nコード】

N6473Z

### 【作者名】

小日向 湊

### 【あらすじ】

唯梓の短編4作品をまとめたものです。拙い文章ですが、少しの間お付き合いいただければと思います。

## 1：冬の日、アナザー\*前

天秤、と言うはかりがある。

それは対象となるふたつの物をそれぞれの受け皿へと乗せ傾き加減で比重を調べるアイテムであり、またそれは物事の比較にも比喩的な意味合いにてしばしば利用され、より重力に従った受け皿の事柄をヒトは重要と位置付けてその皿に乗せた物事を遂行する。

その日、中野梓は嘘をついた。

それは些細な偽りであったが、つかなくてはいけない言わば必要悪の様なものだった。

彼女には一般的に「彼氏」と呼ばれる存在があった。故に聖なる夜に彼等が時間を共有するのは至極当然の話なのである。クリスマス会を開こう、と提案して下さった軽音部の諸先輩方には大変申し訳ないのだが、普段から共に過ごす時間を制限される理由の一端でもある部活動に関する事項は、悪いがその日はかりはすっかりと忘れていたかったのだ。

「彼氏ですよ奥さん」

「若い子はいいわねえ」

二学期の終業式が終わった後の部活動の席で、クリスマス会には参加出来ない意向を伝えた梓に対し、それを茶化す平沢唯、田井中律の両先輩の会話に、

「ち、違います！ 家族と過ごすんです！」

と顔をほんのり朱に染めた梓がした反論。それは、恐らく特定個人がいらっしゃらない先輩方への配慮半分、単なる恥ずかしさ半分と言ったところか。けどそれは、イコール桜高軽音部のメンバーが嫌いと言う事では無いと、いまの梓なら胸を張って言えるだろう。だから唯が出したクリスマス会の代替案である年末パーティーには参加の意を表明したのだ。彼との初詣は、あくまで先約の存在を秋山澗先輩か琴吹紬先輩に話せば、パーティー中でも抜け出す事は可

能だろう。梓はそんな事を考えていた。

軽音部と彼氏、梓はそのそれぞれを年末と言う天秤の違う皿に乗せてみる。すると傾き方は、あくまで彼氏が優勢だったのだ。しかし実際に乗せる事が出来たなら、それはほんの僅かで、幾許の差も無かった事だろう。

きっと。風が吹けば、それに煽られてその立場が逆転してしまう位の、微妙な差

部活が終わって帰宅した平沢唯は、早くも年越しのパーティーを見据えていた。

「ただいまあ」

と言うが早く既に帰宅している妹の憂に年末、軽音部の仲間が泊まりに来ることを告げた。

「そうなんだ、楽しみだね」

憂にとっても馴染みある軽音部のメンバーと一緒に年を越せる事に、彼女も多少ならず嬉しそうな顔をして見せる。

「でもさあ、ほんととは去年みたいにクリスマスパーティーを開こうって言ったんだけど、あずにゃんがその日は無理って言うから年末になっちゃったんだよねえ」

すると「あはは」と笑う唯とは対称的に、憂は至極真面目な顔をした。

「そっかあ、そうだよ……」

刹那、平沢憂は固まった。それは端から見ると「言っただけじゃない事を口にした時の反応」に近いものがあると言えるだろう。

しかし憂にとっては残念な事に、唯はそれを見逃さなかった。

「え？」

口の先ではおどけながらも、唯のその瞳は少しばかり不適に微笑んでいる。

「え？」

対照的にこちらは口の先ではおどけながらも、憂の瞳は笑う事を知らずに右往左往をし始めた。

「な、なんでもないんだよ？」

慌ててそう言った憂だが、そのセリフが火に油を注ぐ発言である事には、誠に残念ながらその言の葉が口を離れて後、実姉の目が爛漫とし出した時に気が付いた。墓穴を掘った、と思つた時にはもう遅かつたのだ。

「なんでもないならそんなに慌てないよねえ？」

完璧超人がたまに見せるドジっ娘属性と、天然が天文学的確率で見せるピカイチの閃きが同時に起こつた瞬間である事は、もはや言うまでも無いだろう。

「あずにゃん、もしかして彼氏がいるの？」

遠慮無く核心を付く唯に、憂は観念した様子で頭を一度上下に振つた。

梓ちゃん、ごめんなさいっ……内心そう思いながら。

「知られちゃつたからには……もっと知りたがるお姉ちゃんの事だし話すけど、ほんとは口止めされてるんだから他の人には絶対に言つちゃダメだよ？」

心配そうにそう口を開いた憂に、唯は「うん、うん！」と目を煌めかせながら文字通りの二つ返事で了承する。心配には変わり無いのだが、約束はきちんと守るお姉ちゃんの事だから、と憂は信じて話し始めた。

「ええと、実は梓ちゃん、中学の時から付き合ってる彼氏がいるみたいなの。名前は教えてもらってないからわからないんだけど、同い年で近くの高校に通ってるみたいなんだ」

「ふむふむ」

「いつだったか梓ちゃんの生徒手帳を拾つた時に、不可抗力で二人と一緒に写ってる写真を見ちゃつたのが梓ちゃんにバレて。初めは梓ちゃん、顔真っ赤にして怒ってたんだけど、気が付いたら彼氏さ

んの事も普通の会話に登場するようになってたな」

「あずにゃん、部活じゃそんな素振り全然見せないのにな」

梓の意外な一面に、唯は正直驚いていたのだ。

「多分知られたく無かったんじゃないかな？ 恋は恋で部活は部活でってケジメをつけてたみたいだから」

「と言うよりは」

唯が口を開く。

「部活で言ったらりっちゃんにネタにされちゃうからかもよー？」

「あ、ははは」

苦笑いしながら憂は、部活で口に出出来ない理由が律さんも去ることながら我が姉にもある事は言い出せずにいる。

『ほんつとに誰にも言わないでね？ 特に唯先輩には絶対だよ？』  
過去に梓に言われたセリフが憂の頭の中で響く。日頃から不本意なあだ名と過度なスキンシップで自分の調子を狂わす張本人に彼氏の存在がバレでもしたら……と思うと、梓はその後の唯からの反応に憂鬱を覚えずにはいられなかったのだろう。

結局のところ、事は本人の知らぬ間に露呈して唯の記憶にインプットされてしまったのだが。

「あ、でも」

憂が何かを言いかけた。唯は「ん？」と返事をして憂の方を見る。  
「最近ね。梓ちゃん、ちよつと元気なかったみたいなの。部活は楽しいって言ってたから、多分だけど彼氏さんと何かあったんじゃないかなって思ってたけど」

聖なる夜は、万人の夢を叶える為にあるわけではない。商戦よろしくお祭り騒ぎに興じるのは極少数の国のみであるし、サイレントナイトに相応しい過ごし方をする方が本来ならば歓迎されるべきなのだろう。

ところで平沢家では、十二月二十四日のクリスマスイブを姉妹仲良く過ごしていた。

「憂は好きな人とかいないの？」

夕刻、ふたりでコタツに入って談笑をしている最中、唯が突然そんな事を言った。

「え？ わ、私？」

「うん」

憂は考える。「いない」と言えばこの件についての会話はそこで終わるだろう。実際、彼氏にあたる人物はいない訳だし。だが仮に「好きな人はいる」と答えたら、唯はそれが誰かを聞き出すまで話をやめないだろう。間違つても本人の前で「その……お姉ちゃんが」とは言えないであろうから。

「……いないかな。いまはお姉ちゃんと過ごすクリスマスが楽しいから、それがいいの」

顔を少し紅くして唯から目をそらしながらそう言うと、そんな嬉し恥ずかしな事を言われた本人は目をうるうるさせて「妹よ！」と叫んでは憂に抱きついた。

「お、お姉ちゃん……くすぐりたいよ」

「だけどそんな唯が、憂は嫌いじゃない。むしろ大好きだった。」

「憂、ういー」

頬つぺたをすりすりし出した姉から直に伝わる体温に心地よさを感じながらも、憂は「もう……」と苦笑いで唯から離れた。「ふええ、ういー……」と言いながら不満そうに頬を膨らます姉に対し、

憂は時計を見てこう言った。

「そろそろ時間だから、ご飯食べに行こうよ、お姉ちゃん」

「うお、もうそんな時間か！」

すると唯は途端に元気を取り戻し、支度をしに部屋へと戻って行った。

「現金だなあ」

と憂はまた苦笑しながら、自分も支度の為に一度部屋へと戻って

行った。

「お待たせ」

梓は待ち合わせ場所に立つひとりの男性に声をかけた。時刻は夕方五時、宵の口ともなれば辺りのきらびやかなクリスマスイルミネーションがより一層輝きを誇示し始める。そんな光の中に、彼はいた。

「待った？」

「全然」

極一般的なカップルの会話は、これから約束される聖なる夜という道を歩く為のパスポートのようなもの。もしもこの物語の続きが、『ふふっ、と女の子が笑って、

「じゃあ行こうっ」

と男性の腕を取って歩き出した。』

……とでも言うのなら、幸せな夜になるだろうけれど。

この子たちはどうやら、少しだけ様子が違うようだ。

「行こうっか」

神妙な面持ちのままふたりは歩き出す。しかし、その手と手同士が交わる事は、ついに無かった。



## 2：冬の日、アナザー\*後

「ふうーっ、美味しかったあ」

レストラン帰りの唯がお腹をさすりながら満足そうに笑みを浮かべた。

「ほんとに美味しかったね」

隣を歩く憂もまた、お腹をさする事は無かったが満足そうな表情をしている。

「クリスマスのご馳走は豪華だもんねえ。毎日がクリスマスなら良いのになあ」

「お姉ちゃん、それだどご馳走に飽きちゃうよ」

「あ、それもそっかあ」

あはは、と笑う唯につられ、憂もまた姉よりも控え目だが笑顔になつた。

「お父さんとお母さんも、今頃クリスマスを楽しんでるのかなあ」

唯が一面真っ暗な空を見上げ、ポツリとそう呟く。

「時差があるからディナーはまだだろうけど、ヨーロッパで過ごすクリスマスって素敵だよな。雰囲気だけでも味わってみたいな」

「そう言えば今年はどこに行ったんだっけ？」

「オーストリアの首都ウィーンだよ。で、そのままヨーロッパを旅行して、飛行機の中から日の出を見るって言ってたよ」

「あ、そうだったねえ。日の出の話は覚えてただけだね」

唯はまた「あはは」と笑う。

「ねえ、お姉ちゃん」

「うん？ なあに？」

笑顔のまま、憂の方を向く唯に、憂もまた笑顔でこう言った。

「私たちも将来、ふたりで旅行に行こうよ」

「旅行？ いいねえ行こう行こう！」

だがしかし、

「あ、でも私英語苦手だよ……」  
唯が悄気る。

「大丈夫だよ、ふたりなら！」  
でもすぐに、憂の笑顔で唯は元気になる。憂もまた、姉と言う存在に元気をもらっていた。

理想とも言えるふたりが談笑しながら歩いていると、不意に唯の足が止まった。つられて憂も止まり、姉の方を振り向くと、唯は道路をはさんで反対側の歩道を見ていた。そこには、

「あずにゃんだ」

中野梓がいた。そして隣には見知らぬ男子がひとりいる。

「あ、ほんとだ」

憂も続けて梓の姿を確認する。

「やっぱり、彼氏さんとデートの予定があっただね」

「……………」

唯は、無言のまま向こう側のふたりを見ていた。

「お姉ちゃん？」

それを不思議そうに見ていた憂が声をかけると、唯は、

「ねえ憂、先帰ってってくれるかな？」

そう言っでどこかに行こうとする。

「え？ ……お姉ちゃん？」

「大丈夫、あずにゃんの邪魔はしないよ」

ふたりの事が気になるのかな、そう思った憂だが、しかし流石にストーリーカーは良くないと唯をとめようとした。

「お姉ちゃん」

けれど、なぜだろう。理由もなく、憂は止めるのをやめた。

「ケーキ食べるから、早く帰って来てね」

多分それは、唯に対するひとつの信頼。唯の目が、ギターに触れている時の真剣なものだったのもあいまったのかも知れない。

「うん」

返事をして唯は憂と別れ、梓のいる反対側へと向かった。唯の後

る姿をじつと見つめていた憂も、そろそろ帰ろうかと家の方に足を向けた時、上空からはいつか姉がプレゼントしてくれた真っ白な、こちらは本物の雪の華が舞い降りて来た。

「ホワイトクリスマス、だね」

ふたりを纏うのは厳かな聖誕祭の空気ではなく、かといって楽しい気なカップルの雰囲気でもない。

気まずさ。一言で言い表せばそれが一番しっくりとくる事だろう。

中野梓は思わず漏れそうになる溜息をすんでのところで飲み込むと、半歩だけ前を歩く少年の横顔に憂鬱そうな表情をしてみせた。彼には見えないようにするその顔は、彼には見せてはいけない表情でもある。当の彼は梓よりも、もっともっと迷惑そうな顔をしていた。

もう、あの頃には戻れない。わかっていた。わかっていたけど、やっぱり諦める事など到底かなわなかった。梓が異性を好きになると言うことを初めて知ったその相手だから、思い入れはより強いものだった。

だけど、最近はおからさまに避けられていた。高校に入学して会う時間が激減したのも理由のひとつだが、多分その所為で、彼には他に好きな人が出来たのだらうと梓は思っていた。いや、好きな人が出来た為かどうかはこの際はどうでもいい。客観的事実として、梓は彼に嫌われている、それがやはり辛かった。

たくさん回った。いままで制限されていた分を全部取り戻すかの勢いで様々な場所に行った。喫茶店にも行ったし、ゲーセンにも行った。ご飯も食べたし、梓の我儘で楽器店をも覗いた。でもふたりが顔を合わせるその都度、ふたり共に心から笑えていない事が浮き彫りになる。会話を繋ぐとしても、いつもどこかでプツリと切れ

る。梓は彼の目を見れない。怖かったから。直ぐ隣を歩く事も出来ず、手なんて尚更繋げない。それでも梓は頑張った。彼もまた、途中で梓を置いて帰る事をせず、一緒に隣を歩いてくれた。

ふたりにとつて、これは最後の思い出作り。互いが互いに決別するための儀式なのだった。

そして、終わりの時が来た。待ち合わせ場所だったところにまたふたりが戻って来て、梓は彼と向かい合う。その距離はおおよそ一メートル。彼の体に抱きつくにも、その唇を奪うにも、十分可能な距離なのに。そこには、ふたりにしか見えない大きな壁が聳え立っていた。

「じゃあな、梓」

「うん……」

ばいばい。

ホワイトクリスマスが嬉しいと感じる人は数多といるだろう。しかし梓には、それが喜ばしいクリスマスの形だとはとてもじゃないが思えなかった。雪降る道の向こう側に消えていく大きかった背中。好きだった背中。その背中が、人混みと降り頻る冬の華によって見えなくなつて。

梓はただただ、立っていた。これでいいと自分に言い聞かせながら。嫌がってた彼を無理矢理付き合わせたのは自分自身だ。もう好きでもない自分に『最後の思い出作り』って言う大義名分を掲げて連れ回したのは自分だ。あわよくば、それで少しでも関係が改善されたら……と思えど現実はその甘くはない。もがけばもがくほど辛くなることは、少し考えればわかったはずなのに。

冬の寒さが、心に染みる。いまは疎ましいだけの結晶が積もりに積もって、頭の上が少し重たく、そして冷たくなっていった。

その時、その雪を払ってくれた人がいた。

「えっ……………」

驚いて、梓は振り替える。そこにいたのは、おんなじパートの頼り無い先輩。

「あずにゃん、風邪引くよ」

平沢唯。

「……………見てましたか、いまの？」

梓は質問する。唯は何も答えない。

「私が付き合ってる事、知ってたんですか？」

梓は問い掛ける。唯はやはり何も答えない。

「……………こんな私を、笑いますか？ 部活と恋の両立すら出来ない、こんな情けない私を」

梓は唯の瞳を見る。それでも唯は、口を開かなかった。

「……………お気遣い、ありがとうございます、唯先輩」

梓は、唯から視線をそらす。

「私、帰りますね。先輩も、風邪引かないうちにあたたかいところに戻って下さい」

そして踵を返し、唯に背を向けた。

刹那。

「あずにゃん」

唯は梓の後ろから手を回し、梓の胸の前で腕を交差させる。梓の冷えた背中には、唯のあたたかな体温が染み渡る。

「……唯先輩」

言わずもがな驚いた梓だったが、すぐに、

「……やめて下さい、こんな場所で。みんなが、見えます」

そう言っただけの拘束から逃れようとする。しかし唯は、梓を抱いて離さない。

「……やめて下さい、って言ってるんです。怒りますよ？」

それでも唯は、梓を離さなかった。

「……なんでなんですか、なんで……離してって、言ってるのに……」

「あずにゃん」

三度目の呼び掛け。唯は、やさしく、

「泣きたい時は、泣いていいんだよ」

そう、言った。

「……ふざけないで、ください……なんで、どうして……」

それを受け、梓の声は、段々と涙声に変わっていく。

「……こう言う時だけ、やさしくて……先輩は優しいです……優しい、です……」

そして。

「うっ……ぐすっ……」

拘束が一瞬だけ緩んだ。梓は体を捻り、唯の胸元に飛び込んだ。

「いっぱい泣いていいよ、あずにゃん」

そんな梓を、唯は強く抱き締める。強く、強く抱き締める。梓の悲しみを、唯が代理で受ける事は出来ない。それでも唯は、梓の気持ちも少しも受け止めようと、梓のやり場のない悲しみを、少しでも自分が引き取るうと、梓に胸を貸した。それは先輩として、仲間として。そして。

中野梓が好きな人間として。

「ご迷惑をおかけしました」

気が済んだのか、泣き止んだ梓は唯にお辞儀をひとつする。

「うづん、いいよ」

唯は唯で、そんな梓の姿を見て普段通りに「えへへー」と笑っていた。

「あ、そうだあずにゃん、うち寄ってかない？ ケーキあるよ」

「え、いいんですか？」

「いいよいいよー、ホールのケーキ、憂とふたりじゃ食べきれないからさ」

それじゃあ、と梓はお言葉に甘えて唯に続く。その手と手は、どちらからともなくひとつに繋がっていた。

冬の妖精は、いつしか地上から消え去っていた。道端の名残も溶けてしまうのは時間の問題だろう。

「今度誰かとホワイトクリスマスを向かえる時は、笑顔で雪を見れますように」

温もりのそばで、梓はそう思った。

### 3：冬の放課後

「ねえあずにゃん、私に飼われてみない？」

寒い寒い、冬の話だった。

空調設備を持たない、放課後の音楽準備室。彼女達、放課後ティ  
ータイムの部室。平沢唯は何の前置きも無しに、長椅子の隣に腰掛  
ける中野梓にそう言った。

外は冬の晴れ間。日は短く、綺麗な茜色が街を、学舎を染めてい  
る。そのあかりは窓より入りて、ふたりの顔も同様に染めていた。

「……なんですか、急に」

梓は、唯の発言を受けて訝しげに目を細める。

「だから、私に飼われてみない？ ほらほら」

唯は携えていた愛用のレスポールを脇に置くと、右手で手招きを  
した。おいでおいでをするその姿は、どこか本物の仔猫を手招いて  
いるような印象を受ける。

「もう……ふざけてないください。練習するんじゃないんで  
すか？」

他の部員は、今日はいない。何故いないのか、梓にはわからない。  
梓が来た時には、部室には唯しかいなかったのだ。

「他のみなさんは？」と尋ねた梓に「用事だつて」と端的に答えた  
唯が、何故か珍しくギターを弾きただけであったこともあり、無用な  
詮索などせずふたりで練習に励んでいたのだが。

それがもし、唯先輩がこんなことを言い出すために仕組んだ  
のだとしたら

梓はかぶりを振る。いくらなんでも、考え過ぎだ。

梓はムスタングを構え直すと、唯にもレスポールを再度携えるよ  
う促した。

されども唯は、それに従おうとはしない。

「え〜やだ〜あずにゃんを飼うまで練習なんかしたくないよ〜」



とんでもない駄々っ子である。梓は思わず、溜息をこぼしてしま  
った。

「だいたい、飼うってなんなんですか、飼うって。ひとを猫か何か  
と勘違いしてませんか？」

「してないよ、あずにゃんはあずにゃんでしょ？」

その『あずにゃん』と言うあだ名が、既に唯の中では自分と猫と  
の融合体の固有名詞と化していること、それを唯に説明するにはど  
れだけの言葉を尽くせばいいのか。梓は一応考えてみたものの、す  
ぐにそれが徒労に終わるだろうことを悟ってしまった。

それに、いまはわりとどうでも良いことだ。いや良くは無いが、  
目下の最優先事項はレベルを外れた唯先輩を再び練習の道へと引き  
戻すこと。ただそうなると　一筋縄ではいかなそうな様相ではあ  
る。

唯はおとぼけた感じでありながらどこか頑固な一面もある。例え  
ば……梓は考えるのをやめた。思い浮かぶ例が、全て自分に関係す  
るものだったからだ。

可愛がってくれるのは有り難い。それは梓とて拒みはしないが、  
さりとして相手は『可愛がる』のベクトルが一般人と若干ズレている  
唯だ。過度なスキンシップが、どのような感情に由来するものなの  
か、梓ではその本心を図ることはできない。単純に好いてくれてい  
るのか、それとも……。

「あずにゃん、どしたの？」

「え？ ……ああ、すみません」

ついつい考え込んでしまったせいで無言になっていたようだ。怪  
訝そうに見つめる唯に謝りを入れ、三度梓はムスタングを構える。

「ほら、練習しましょ」

しかし唯の態度は変わらない。

「いや。あずにゃんを飼うの」

頑なだ。何がここまで、唯を頑なにさせるのか。梓はやはりわか  
らなかつた。

「……もう、私帰りますよ」  
わからない以上は、付き合いきれない。と言うより、練習しないのならここに居る意味が無い。お茶も、お菓子も、談笑もない音楽準備室に。

ギターをしまい、席を立つ。荷物を持って、梓は出入り口の方へと歩を進めた。

「あ、待ってあずにゃ……！」

慌てて立ち上がる唯。しかし慌て過ぎたせいか、自分で自分の足に蹴躓いては盛大に前のめってみせる。ドテン、と非常に気持ちいい、しかし痛そうなお音が音楽準備室内に響く。

「いたた……！」

なんとか、と言った具合で唯は膝立ちをする。あまりのことに、梓は踵を返して唯の元へと駆け寄った。

「大丈夫ですか、唯先輩？」

同じく膝をつき、唯と同じような高さになる。

「……うん、なんとか大丈夫だよーっ！」

うにゃあ　っ！

梓が上げた悲鳴は、唯の胸の中に消えていった。

「隙アリだよ、あずにゃん」

梓の頭の上に顎を乗せ、唯が「してやったり」と満悦そうに笑った。

近づいてきた梓に抱き着こうと、唯が考えたのはいつの話だろう。もしかしたら転ぶ前から、この展開を目論んでいたのだろうか。しばらくは我が身に何が起こったのかを理解出来ずにいた梓は、数分経過後、まずそんなことを考えた。

……抵抗は、しない。するだけ無駄だ、と思った。

唯は、暖かかった。夏に憂は言っていた。お姉ちゃんはあるか。って。確かにそう思う。そしていまは、そのあたたかさがとても

心地の良いものだった。

「ふふつ、あずにゃんだあー」

後頭部から背中への辺りをしきりに撫でる唯は実に満悦そうだった。これが、『飼う』ってことなのだろうか。普段のスキンシップと何等変わりがない、この行為が。

梓は考える。しかし、答えなど浮かぶはずがない。あたりまえだ、梓は唯ではないのだから。

しかしながらこれが唯の言う『飼う』だとしても、梓は噛み付いたり引つ掻いたりするつもりは毛頭無かった。人肌を感じながら発展途上の膨らみの間に顔を収めているこの状況が、何と無く安心出来たからだった。

寒い寒い、冬の部室。唯と梓だけの、音楽準備室。茜色は自身に照らし出す室内で、飼い猫と女の子を、その時まで彩っていた。

唯はずっと『あずにゃん』を抱きしめていた。

#### 4：雨の七夕\*前

「遅くなっちゃったね」

「もう……わざとのんびりしてたくせに、何言ってるんですか」

考えなしの先輩を横に、梓はただただ、嘆息した。

時刻は午後の七時を回っている。本来なら、彼女たちがこんなに遅くまで練習に励むことなど無いのだが、今日ばかりは様子が違った。

「あ、私居残って練習していくよ」

ティータイムと練習を終えた後に、珍しくもそう言い出す唯に、他の四人の部員たちは一様に目を見開いた。

「……何か悪いものでも食べたのか？」

ついそう口走ってしまった律に対してしかめっ面をする唯だったが、律の言い分は、他の三人には共感する部分があったのは間違いなかった。現に漣と紬は苦笑いをし、梓は至極真面目な顔を見せる。

ついでに言えば、梓にとっては何か思う部分もあったのだろう。

「なら私も、唯先輩の練習に付き合います」

すると梓は言った。

「え、いいの？」

「はい。先輩が上手くなって下さるなら、私は尽力を惜しみませんから」

きっぱりと言い切る梓に、唯は苦笑しつつはにかむ。嬉しいのだろうと言つことは、他の三人にも容易に想像が出来た。

律、漣、紬の三人が部室を後にする。しばらくした後、唯は唐突に梓へと抱きついた。

「……練習するんじゃない無かったですか」

されど梓が驚愕することは無く、苦しくない、程よく心地よい抱擁をつけてなお冷静に言葉を発する。ある程度の予想がついていたためか、もしくはは始めからわかっていたためか、どちらかだがこの際それはどちらでも同じことだった。

「すると思った？」

いたずらっぽく訊ねる唯に対して、しかし梓はきつぱりところ述べる。

「思いませんでした」

だから、梓はムスタングを構えていない。唯ならきつと、まずこつするだろうと思ったからだだった。

抱きつかれたことは何度もあったけれど、抱き締められたことは、あの冬の日が初めての体験だった。

唯先輩の体温を強く感じた、あの日。

梓は、それを懐かしんだのだろうか。

もう一度抱きすくめられたくて、自ら唯に付き添おうとしたのだろうか。

あの真面目な表情は、あの日を回想していたがゆえのものだったろうか。

しかし梓は胸中、かぶりを振った。

結局のところ、わからないのだ。

あの冬の日に、抱き締められた日に、なぜそれを振り払わなかったのか。唯ならもし振り払っても、きつといつでもどおりに接してくれただろう。

彼女の体温が安堵出来るものだったことは認める。それはまるで頭まで羊水に浸かり眠る胎児を思わせる、深い、深い慈愛に満ちたものに思えた。梓はそれを、望んだのか。

まどろっこしい話は抜きにしても、結局、梓は唯が好きなのか、それが、明確ではなかった。

「唯先輩」

梓は、問う。

「先輩は、私のことが好きですか？」

唯は答える。

「うん。大好き」

その“大好き”は、果たして恋愛感情に起因するものなのか。梓についていないのは、つまるところその部分の区別なのだ。

「あずにゃんは」

今度は、唯が問う。

「私のこと、好き？」

梓は、躊躇いがちに答えた。

「……多分、そうなんだと思います。ごめんなさい、実は良くわからないんです」

「そっか」

しかし、唯は満足そうだった。

「少なくとも、嫌いではないんだよね。私はそれだけでも嬉しいよ」  
口先だけでは何とでも言えることを、先輩は忘れていたのではな  
いか。梓がそう思うほど、唯は素直だ。

さりとて梓が唯を嫌っているならば、勿論だが抱きつかれたまま  
問答するなどあり得ないことである。

行動で立証されていることを、わざわざ口に出して言う意義は、  
なんだったのだろう。梓は考えたが、すぐにやめた。

否、やめさせられてしまった。

唯が、梓を離れたのだ。

「……唯先輩？」

途端に襲いかかってくる不安を払いつつ、梓は声を上げた。

「うん？」

しかし唯は、訊き返すのみで何も答えない。

「……いいえ、何でもないです」

「へんなあずにゃん」

変なのは唯先輩です、と言いたい衝動を抑えて、梓は、ムスタン

グを手にした。

唯が、愛用のレスポールを手にしたためだった。

「じゃあ、練習しようか」

あまりに態度が豹変している唯に疲労を感じながらも、梓は否応を言わずにそれに従った。

## 5：雨の七夕\*後

さわ子先生がやって来て、

「音がするから来てみたら、あなたたちまだ残ってたの？ 練習熱心なのは歓迎するけど、今日はもう遅いから帰りなさい」

と告げ、唯と梓を音楽準備室から強制ログアウトさせたのがつい先程の話。

夜の七時は、普段ならまだ日の出ている明るい時間帯ではあったが、今日は上空を厚い雲が覆っていたため、暗かった。

校舎を出るまではその顔に笑顔を覗かせていた唯も、外気と触れ合いだしてからは表情が全く冴えない。

折しも今日は、七夕だ。

「晴れないかなあ」

唯は呟く。

「……難しいと思います」

梓が答える。

梓だって、晴れて欲しいとは思っていた。七夕に特別な思い入れがあるわけではない、だが一般論として、鈍より曇り空よりは、見渡す限りの星空の方が気分が良いし、ロマンチックだと思う。

ただ、こつも街が明るいと、それを十分に堪能出来ないのが残念ではあるが。

「……あ」

唐突に声を上げたのは唯。理由は、空から落ちてきた、いまは至極ありがたくない自然の恵みに起因した。

「雨……」

ぽた、ぽた と。それはまるで、頬を伝う涙滴に等しい。

事実、今日の日の雨は催涙雨と呼ばれる。それを織姫と彦星が流す涙と捉えれば、些か幻想的かもしれない。

されど、



「空が、泣いてるのかな」

唯は、そうは捉えられなかったらしい。彼女が催涙雨についての知識を持ち合わせているかどうかは定かでは無いが、七夕の雨に対して、良い印象を抱いていないことは明白だった。

天を仰ぎ……ぼおっと、その先を眺め続ける。ギターが濡れてしまふことなど、お構い無しの様子だ。

「唯先輩、傘は？」

「持っていない」

「私、傘持ってますよ」

言つと梓は、自分のバッグの中から折り畳み式の傘を取り出して広げる。そして唯の横に密着する形で、傘をふたりの頭上に掲げた。小柄で華奢な梓に見合った傘のため、どれだけふたりが近づこうと、その全てを雨粒から守りきることは出来なかった。

雨が比較的小降りであることが幸いしているが、そのまどろっこしさはどこか、織姫と彦星を連想させる。

そのまま、ふたりは、無言で歩いた。

話すことが何も無かったわけではないが、傘より下に滞る雰囲気、梓の口に鍵をかけてしまっていた。

唯もまた、何かを口にするとはなくただただ歩いている。了解を得ずして傘を差してしまつた梓だったが、唯はそれについても何も言わなかった。「ありがとう」とも、「やめて」とも。

ところで雨脚は時間が経過すると強くなつていった。梓の傘では唯と一緒に歩くことすら難しくなるほど強く降り頻つた。

たまらずに、梓は近くにあつた雨宿りが出来そうな軒先へと唯を誘導する。唯は梓に続き、豪雨を向こう側へと追いやった。

並んで立ちつくすふたり。ギターを大事そうに抱える唯の表情は、やはり冴えない。

「あずにゃんはさ」

「ややあつて、唯が口を開く。」

「こんな天気でも、織姫と彦星はちゃんと会つてると思う？」

それはある意味では唯らしい、メルヘンチックな問いだった。

「ええ、きつと」

梓はそれを肯定する。

「そっか」

唯はそう言うと、先程のように視線を斜め上方向へと投げる。雨粒と、黒い雲の遙か彼方、織姫と彦星が座す天体の小さな、小さな輝きたちを、唯は無心で見つめ続ける。

否、見つめ続けたかったのだろう。

それは、現状では叶わぬ夢に等しかった。

少し時間が過ぎ去れば、唯もとうとうそれを諦めて、ギターを地面へと置いた。

そして隣の梓を抱きすくめた。

「！？」

今度ばかりは梓とて予想の外にある唯の行動だった。瞬時に息を飲み込み、鼓動が高鳴る。息苦しさを感じながら、さりとしてそれも数秒程度の話であり、唯の体温は、梓に安堵感をもたらした。

「先輩……？」

「わからないの」

唯の声は、心無しか若干の振動を伴っているように感じた。

「わからないことが多くて、結局、何もわからないの」

「なんですか、それ」

「……わかんない」

けど、と唯は続けた。

「不安、なのかな……これからのこととか、いろいろ。いままではずっと、ずっと、こんな時間が続くと思って……でも三年生になって、ああもう最後なんだって思うことが増えてから、よくわかんないことも多くなって」

ぎゅっ、と。梓を抱く腕の力が強くなる。

「それにあずにゃんのことだって……大好きなのに、卒業したらもう会えなくなるのかなって思うと、辛いんだよ？ すっごく……あ

ずじゃんは、織姫と彦星は雨のなかでもちゃんと会ってるって言うけど、なら私は……どうなのかなって。雨が降ったら、もう会えなくなるような気がして……怖い、のかな」

いつになく弱気な唯は、一度抱擁を解いた。

「こうして離れたら、あずじゃんに、もう触れられなくなるのかな……」

対して梓は、

「そんなわけ、ないじゃないですか」

淡く、笑った。

「ひとつだけ、わかったんです」

唯がしきりに抱きついてきたり、抱き締めてきたり、頭を撫でたり、頬を擦り寄せたり 雨空をすぎるように眺めたりするのは、その胸中で渦を巻く不安と恐怖が原因だった。だから彼女は、“大好き” な梓と、ずっと触れ合っていた。不安を紛らすために。“大好き” だから。

「……なあに？」

「私」

では梓は、唯の何なのか。

ひとりの後輩か、同じパートの女の子か。

少なくとも、それだけでは収まりきれないと、言い表すことができないと、梓は悟った。

大好きだと、唯は言った。恐らく唯の気持ちは、大好き以上でも、大好き以下でもない。ただただ純粹に、唯は梓のことが“大好き”なのだ。

梓がわかったのは、唯の本心だった。

だから、

「唯先輩のことが、大好きです。大好きだから、例えば雨の降る夜だって、唯先輩に会いに行きますよ」

そして今度は梓の方から、唯の胸に飛び込んだ。

「あずにゃん……」

一瞬驚いたような顔をした唯も、気が付けば胸にいる梓を優しく抱いていた。右腕を背に、左手を後頭部に回して、包み込むように梓を抱いた。

寒い寒い、冬の日から、雨が降り頻る梅雨の季節まで、こうして何度も梓を抱いた。されどここまで、やさしい気持ちになれたのは、初めてのことだった。

ゆっくりと……唯は手を離れた。

梓は、唯の胸から顔を離すと、先輩の表情を覗き見ようと上を向く。

その顔は 穏やかな水面を思わせる無表情で、両の瞳は閉じられ、次第に。梓の方へと近寄ってくる。

梓は、流れに身を任せた。

ふたりの唇が重なるとき。

催涙雨は、峠を越えて行った。

## 6：背中合わせのクリスマス\*前

吐く息は白く、冬を思わせる。どれだけ夏が暑かろうと、数ヶ月後にはこうして雪が落ちてくるような寒さにまでの落ち込みをみせる。季節のめぐりと言うのは本当に良くできているな、と仔猫は今更のように感心する。

寒ければ寒いほど、誰かに寄り添う理由ができる。

理由があるのだから、心身凍える凍える仔猫が寄り添わないはずがなく。

「あ、あずにゃん……?」

それはいつも彼女にべつたりの平沢唯さえ驚いてしまうほど。

「にゃ! ご、ごめんなさい……」

意図せずくつき過ぎていたことに、他ならぬ梓が驚いた。

ひと時は離れるが、さりとして唯の人肌にそっぽを向くことはとてもじゃないができない。

「今日のアずにゃんはいつもに増して甘えんぼさんだね」

にゃにゃしながらそんなことを言う唯に、梓は嘆息しつつ「誰のせいだと思ってるんですか……」と独りごちてみせた。

「ん、なあに?」

「何でもありませんよっ」

顔を顰め、仔猫は唯とは逆の方に視線を投げた。

腕は、なおも絡めたまま。

「変なあずにゃん」

唯が訝しむのも、無理もないと言うものだ。

むっ、と梓もしかめっ面を作るが、されどそれが唯に見えてしまっことはない。

一度逸らした視線と言うのは、なかなかどうして戻るのが難しかった。

妙に意地っ張りな性格は、直すのに時間がかかりそうだと言っ

いデータでもある、と言えるかもしれない。

(ほんとに、誰のせいだと思って……)

今度ばかりは梓も唯に言の葉が知られぬよう、胸中ぼつりと呟くことに徹した。

それでも『大好き』な先輩を想えば、意図せぬ部分の行動で、それ相応に物申すことがある。

今日に限った話であれば、あたたかな唯の腕にしがみつくと、言ったところ。

人目を気にすることさえなければ、もっと大胆に、もっともっと過激に、もっともつともつと求めるような仕草をして見せたのかも知れないが、そこは理性か、はたまた単なる気分の問題か、あるいはその両方か　いずれにせよ、梓にはそれ以上の行動を起すだけの何かが不足していたのは揺るがぬ事実だった。幸か不幸か、いまの梓には、到底答えられそうにもない。

答えなんて、要らないけど。と、梓は思った。

「

本日何度目かのホールディングを受けた唯は、しかしそんな後輩をどやしつけるでもなくただただそれを甘受するのみ。

普段とはまるで逆の構図を彼女なりに愉しんでいるのか、それも

「あ、雪だ」

唯が言う。つられて梓が天を見上げれば、目に映ったのはそこかしこに舞う小さくてはかない、冬の使者。

街路は電球で装飾されている。煌びやかな木々に、白の霞みは良く映えた。それがしんしんと降りしきるのみならば、ロマンチックなことこの上なし。

期せずして今宵もホワイトクリスマスになったこと、唯はどうか知らないが梓はそれなりに喜んだ。

寄り添う理由が、また増えた。

(思えば、始まりはこの日、だったのかも)

いつかの聖誕祭前夜。

梓の頭に積もった雪を払ってくれたのは、他ならぬ平沢唯だった。身体は冷え冷え、心まで凍りついた梓を温もりの中へいざなったのは、いま隣にいるこのひとだった。

だとすれば、今日はある意味記念日にでもなるのだろうか。

あれがなければ　彼女がいくら親しい先輩と言えど唯をここま  
で受け入れていたかどうか、明確な答えは出せない。

それを考えるだけ無駄だ、梓はそれに気づいていたが。

「楽しそうだね、あずにゃん」

すると唯が口を開く。えっ、と思つて彼女を見やれば、その表情は淡い笑みで彩られていた。

そして思い出す、天を見上げたみずからの顔は、唯の立ち位置からなら容易に覗き込める、と。

意図せぬ部分の行動は、此度は表情筋の歪みだったのだろう。

「ええ、楽しいです、とても」

「ただ歩いてるだけなのに？」

「はい。ただ歩くだけでも楽しいんです」

本音。

それは嘘偽りない梓の心の声であった。

楽しくないわけがない　ただでさえ受験の関係で会う時間そのものが減っているのだから。

こうして時間を共有するだけでも、仔猫の心は温もりで満たされていく。

だが唯はどうなのだろう。

「唯先輩は」

「ん、なあに？」

一瞬躊躇ったが、梓は訊いた。

「楽しくないですか？」

「そんなわけないじゃん」

間髪いれずに返ってきたのは、質問に対する強い否定の表れ。

「あずにゃんにぎゅーってされてるのに、つままないわけがないじやん？」

そして微妙に疑問系。

「なら」

梓は笑う。

「これで充分だと思いませんか？」

偽りの笑み。作り笑い。

(高校に入学して、笑うの上手くなったかも)

特にここ最近はね。梓は思う。

仮面でもつけなければ、この厳しい冬の寒さにやられてしまいかねない。

「えー、でもそれとこれとは別だよお」

しかし、

「私あずにゃんにならずつとずつときゅーってしてもらってたい」

彼女が選んだ仮面は、思いのほか脆かった。

無邪気な先輩がほんの少し触れただけで、いとも簡単に壊れてしまっ  
まう。

仮面の奥、さらけ出された仔猫の素顔は、仮面より更に繊細だ。  
だから、

「あ、あずにゃん？」

涙を流すこと、そう難しいことではない。

「ごめんなさい。梓はそう言っ」と、

「少し疲れましたね……どこか、少し休憩しませんか？」

涙を拭わず、笑ってみせた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6473z/>

---

けいおん！先輩とあずにゃん

2011年12月24日08時53分発行